

今、イギリスには「孤独担当省」というものがありますが知っていますか？孤独によって鬱になったり、自殺したりする人がたくさん出ていて、その鬱をいかに戻すかを考えたり、そこから引き起こされるテロの対策などを行っているのです。また、昔、原発事故が起こった、チェルノブイリでの事です。事故によって人々はその地を離れたが、何年か経ってもう一度その地に帰ってきたお年寄りのほうが、帰らずにその場所を離れてしまった人より長生きしているという結果が出ているのです。その理由として彼女らはすごく助け合い、関係を保っており、その中でそれぞれが、自分の存在意義を見出して生きていました。環境のバランスは悪いが、そのアンバランスを補うほど、この「コミュニティ」が彼女らを支えている。それが長生きの理由ではという説もあるほどです。これらのことから何が言えるのでしょうか。それは「バランス」と「コミュニティ」です。私たちはいつも「バランス」を欠いて失敗をします。だから神様は人が罪を犯してバランスを欠いたとき、憎しみあつた人間に愛し合い協力する方法を与えました。それが「コミュニティ」です。コミュニティとは私たちの「体」に例えることができ、それぞれの器官がそれぞれの存在価値を知って、他人を自分よりも優れた存在だと思ふところ。つまり、私たちは一人一人全く違いますが、コミュニティというのはこの違いが理解されて役割を知る場所なのです。私たちがバランスを崩すのはいつも生活です。「豊かさ」が私たちがアンバランスにするのです。

第一次宣教旅行後の問題

① ミッション・インポッシブル&コンプリート

「この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。」(使15:16) これは弟子たちが第一次伝道旅行を終えた後の箇所ですが、弟子たちが帰ってきて安定すると、もめごとが起こったのです。

私たちの人生は「ミッション・インポッシブル」です。普通に考えると、ありえない、やりえない事をするから大変です。ミッション(やるべきこと)をコンプリート(完成)するためには命がけです。ところが、不思議なことに、成しえないことは成しえ、成しえそうことはわりと成らないのです。人生はできないことをやってみることの連続です。そして大事なことは成し遂げた後、そこにあぐらをかかないことです。成し遂げた人が成し遂げ続け、次の人に継承されるのは、その人が次のことを成し遂げるからです。人は裏切られると大概、もうその人とは関わろうとはしません。しかし、多くの物事を成し遂げる人は、関わらないと決めた人と関わることで自分の成すべきことを完成させていっているのです。だから何か終わった後に気を付ける必要があります。「すごい」は危険です。それで終わったと思うからです。ほとんどの物事は私たちが何かを成したら代償がもたらされるようになっていきます。でも最近では逆の人たちがいます。その人たちは「何かを蒔いて刈り取る人生」ではなく「刈り取ったら働く」という人生なのです。でもこれがうまくいくはずがありません。義務を果たさず権利を行使するからです。だからコミュニティが大切なのです。コミュニティではそれぞれが助け合えないとできません。だから神様は糧を得るために一人ではできないという農業の仕組みを与えました。助け合えないとできないのですが、今はそれが分業制です。こうやって分業して生きているのに、人が「個人」になってしまったことが問題なのです。「わたし」には第三者はいません。正しくは「わたしたち」なのです。だからといって、同じ考えの人たちが集まっているのが本当のコミュニティではありません。わたしたちが今作っているコミュニティの多くはこの「同じ穴のむじな」なのが問題です。それではほとんどそこに「教育」はありません。違う種類の人が集まるからよいのです。こうして「人は人によって研がれる」方法を神様は選ばれたのです。

「見よ、兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんといい楽しみであらう。それは頭の上にそそがれたとうとい油のようだ。それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れわたした。それはまたシオンの山々におけるヘルモンの露にも似ている。【主】がそこにこしえのいのちの祝福を命じられたからである。」(詩133:1~3)

ここでは、みんながコミュニティを回復して集まっていると、争いがなくなると言っています。散らされたイスラエルの民が1年に1度、都(エルサレム)に上って来る時の都上りの歌ですが、私たちがもう一度苦しい状況になったとしても、みながともに1つになるということをもう一度考えると、人生が水(いのちの源)で満たされるということなのです。

② 外に向く力が求心力

家族が「自分が」と言い出すとコミュニティが壊れます。そこに

は慣習(これまで手掛けてきた経験に基づいたもの)があるからです。それがよいものならよいですが、多くのものが「今までやってきたから」というものだからです。これは捨てなければいけません。捨てたうえで、「愛のルール」が大切です。愛のルールとは何でしょう。その人にとって大切だから伝わる…つまり「愛によって」伝えるということです。本来、ルールは裁くためではなくガードレール(こうなるためのもの)です。にもかかわらず、私たちはこのルールを、人を裁くために使ってしまうています。そんなところはないですか？この愛に基づいてやったのが「イエス・キリスト」です。彼はガードレールから逸脱した人生を、ガードレールの中に戻そうとしたのです。裁くためのルールがコミュニティに入ると壊れます。それがあなたの家庭に忍び寄っています。

③ 廃墟の幕屋・礼拝は人生のリハ(リハーサル、リハビリ)

だから「幕屋の回復」が必要です。幕屋の回復とはなんでしょう。「この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。」(使15:16)

ダビデがウリヤの妻であったバテシェバを奪うという大失敗をした後、自分のしたことを心から悔い改めました。そしてその後バテシェバから生まれたのがソロモン王でした。人間的に考えれば「ええ!？」と思うような理不尽なことですが、それでも神様は、失敗を悔いたものに赦しを与えるというのが聖書のストーリーなのです。

礼拝は宗教儀式ではありません。ダビデが裸で神様を賛美した姿、まさにそれが礼拝です。失敗した時もうまくいった時も、彼は神様の前に出て祈りました。そして彼は神様の前で人生のリハ(リハーサルとリハビリ)をしたのです。みなさんには礼拝の場所がありますか？礼拝は自分のやりたいことをやりやすいようにやる場所ではありません。礼拝は自分の現実とあるべき姿の違いを見つめる場です。私たちは普段本当の自分でない自分を演じています。そんな私たちが、本当の自分のリハーサルに来て、本当の自分に戻ろうとしているのです。だから礼拝は時として痛いでしょう。でもそれが私たちの「バランス」であり、自分の幕屋を回復する方法です。

さいごに

アメリカの鉄鋼王のアンドリュー・カーネギーという人がいます。子どもの頃から彼は、コミュニティの中で生活していました。その後、大変な時もありましたが、彼は鉄鋼の仕事で大成功をしました。久しぶりの休暇で、スイスに行ったとき大きな教会を訪れ、そこで一人の修道女からこの教会を建てた、ある大富豪の話聞きます。人生に困ったことがなかった彼が、一人娘を失ったことをきっかけに、自分の人生が実は何も残っていないものだということに気づき、そこから変わったという話を聞いて、カーネギーは自分も一緒だと感じたのです。そしてそこから彼も生き方を変え、貧しい人にも学ばせてあげたいという思いから、まず初めに彼は図書館を建てました。カーネギーの、そう思った思いは、その後、彼の子孫にも継承されていきます。

「どんなに財産を蓄えても、人が死ぬときには裸なのです」これはその時の修道女が言った言葉です。彼女の部屋には何もありませんでしたが、花がありました。でも彼女の部屋は逆でした。ものはたくさんありましたが、花はありません。命がなかったのです。このような話を聞いても、多くの人は「自分には関係ない」と感じる事ができないかもしれません。でもカーネギーはこのことから感じる事ができました。それは彼が「コミュニティ」を知っていたからです。みなさんは感じる事ができますか？

今、私たちに与えられているコミュニティとは、何でしょう。教会です。私たちの家庭です。そしてあなたの家族は本当のコミュニティですか？あなたのために存在する道具になってはいないですか？もし、家庭が自分のためだけに存在しているのであれば、内向きになって内部分裂が起こります。だから今、コミュニティの回復が大切です。そして、あなたに与えられているコミュニティに人を招きましょう。ヘルモン山では朝露でいろいろ生き物が生かされています。私たちが本当の自分に帰り、与えられているものを正しく使って、このヘルモン山の露のように、わたしたちにかかわる人々が生かされる、そんな歩みをしていきましょう。

(要約者:岩崎 祥誉)

(2020年8月16日)